

遠藤隆吉における実学

2025年6月

遠藤隆吉研究所長
総合政策学部教授

朽木 量

遠藤隆吉の実学～建学の趣旨～

- 遠藤隆吉「建学の趣旨」全文

能力を外にして長幼の序を認め、為にする所なくして人格の光を仰ぎ、天道の自ら至るを恐れ人倫の當に依るべきに従う。人類を一視して其の幸栄を増進し、**有用の學術を修め**質実の気風を養い、**適く所として其の天職を完うせん**とす。（『巢鴨精神』 p.6）

遠藤隆吉の実学～天職～

- 英語の好きなものには之を習わせる。運動が好きなものには其の儘にやらせる。各々其の好む所を発達させてやると云うことも又教育の一法である。（『老子をして今日に在らしめば』 p.9）
- 或る程度までは天才は天才の儘に放任し発達させることが肝要である。（同書p.10）
- 韓非子は適材適所は自から言ひ出して来ると云ふのである。（同書p.12）
- 即ち放任し彼から自分の特色を言ひ出す様にさせるといふのが目的である。（同書p.13）
- 過干渉せず放任し、自らが才能を発達させ、活かせるようにしてやる。お仕着せの学びではない。

遠藤隆吉の実学～实用教育の排斥～

- 我々は**實用主義には勿論賛成**である。（『教育及教育学の背景』 p.176）
- 殊に**近來は其の實用主義を極端にまで行ひ、社會と學校との接近と云ふことを奨勵して居るのである。併ながら實用主義の一面には又必ず裝飾と云ふことが伴ふて居らねばならぬ。何となれば今日の實用主義の教育と雖も禮儀と云ふことは喧しく言ひ、作法と云ふことも喧しく言ふ。即ちそれだけ遙か裝飾が存在して居るのである。**（同書 p.177）

遠藤隆吉の実学～实用教育の排斥～

- 私は**实用主義の教育に反対**である。世の教育者は児童が**实用をなすのを好まない**。飯を炊く真似や田を植うる真似 凡て真似事を喜んで居る。此の如き**实用主義は児童を浮薄に導く所以**である。
(『教育及教育学の背景』 p.1)
- **身に体する方面の实用主義は極めて宜い**。身に体さなければ**其の人のものになって居らない**のである。(同書p.194)
- 私は**現代の真似事主義なる实用教育を排斥せんとするものである**。その位の**浮いた常識は知る必要はない**。其の暇には**古典を学ぶに如かざるもの**となすのである。(同書pp.200－201)

遠藤隆吉の実学～実用教育の排斥～

- 「我々は實用主義には勿論賛成である」「有用の学術を修め」⇒実用主義自体には賛成
- 真似事の実用主義教育には反対
- 表面的で真似事の知識で学んだ気になるのではなく、古典から「精神の装飾」を学ぶとともに、**実社会**で得られる**「実践知」**を身に体することが重要

治道家

- 治道なる言葉があるが、この言葉は政治と教育との両者を包含している。今日の社会においても、やはり治道家なるものがないといけない（『硬教育』 p.3）
- 教育学者必ずしも教育家にあらず、学者必ずしも達見家にあらず、政治家必ずしも教育と学とに詳かなるにあらず。社会の病弊を洞破し、全体の上より一部を観察するは治道家にあらざれば能はず（同書p.3）

治道家

- 政治とは何ぞや。即ち日本の文明を催進し、國運の発達を
図る作用である。教育とは何ぞや。同じく日本の文明を催
進し、國運の発達を図るのである。この大目的に於ては両
者は互に相一致して居る。政治は一種の目的を定めて是に
向って突進するのである。教育も亦一種の目的を定めて是
に向って突進するのである。この点に於て両者相一致して
居る。（中略）政治と教育とは全く其根底を同うし、従っ
て政治家と教育家とは精神活動に於てまた同じからざるを
得ないのである。（『硬教育』 p.302）
- 治道なる言葉があるが、この言葉は政治と教育との両者を
包含している。（同書p.302）
- 苟も國運の発展、文明の進歩に利益である所の事柄であつ
たならば、凡て之れを研究しようとするのは、言はば治道
家の職務である。（同書p.302）

治道家とは

- 今日の如き多事の時に方り、世界を相手にせんとする此時に方りて、**無気力、無精神なる人間を作っては何の役にも立たない**であろう（『硬教育』 p.308）
- 治道家とは文明の進歩と国家の発展に寄与すべく、学問・教育・政治といった枠組みを超越して、社会の諸課題に対して全体を俯瞰しつつ、目的に向かって突進することができる人物

CUCにおける実学教育

- 今日の教育は軟に過ぎて居るようである。もう少し硬教育として生徒の努力を多からしむることが必要でないかと思う。（『硬教育』 p.307）
- 手取り足取り噛み砕かれてお膳立てされたお仕着せの学び、真似事の実用教育を排斥した遠藤先生の真意を汲むことが大切
- 実社会に根差した「実践知」を身に体するなかで、有用な学術を修め、個々人の才能を自発的に活かして天職に就き、全体を俯瞰しつつ社会課題の解決に果敢に取り組む人材を育成していくことが「実学教育」に求められているのではないのでしょうか。

参考文献

- 遠藤隆吉『硬教育』1910年 富山房
- 遠藤隆吉『老子をして今日に在らしめば』1925年 早稲田大学出版部
- 遠藤隆吉『教育及教育学の背景』1926年 富山房
- 遠藤隆吉「建学の趣旨」『巣鴨精神』1935年 巣園学舎出版部
- 遠藤隆吉『巣園自伝』1938年 巣園学舎出版部
- 朽木 量「『家学の書』と遠藤隆吉の儒学思想の系譜」『家学の書』2024年 千葉商科大学総合研究センター 遠藤隆吉研究所資料調査報告 第1号 pp.19-33